

感謝 IAT の開発の試み¹⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科 林 楚悠然

鹿児島大学教育学系 稲垣 勉

筑波大学人間系 相川 充

The challenge of developing a Gratitude IAT

Chuyouran Lin (*Gratitude school of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Tsutomu Inagaki (*Research Field in Education, Kagoshima University, Kagoshima 890-0065, Japan*)

Atsushi Aikawa (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study aims to develop a new implicit measurement of trait gratitude using the Implicit Association Test (IAT), and to test its validity and reliability. Thirty-eight college students visited the laboratory twice within a 3-7 day interval ($M = 4.55$, $SD = 2.33$). On both occasions, they undertook the Gratitude IAT and completed self-ratings for trait gratitude, gratitude behavior, self-esteem and empathy. The results revealed a relatively high correlation between the two occasions of .63 ($p < .001$). Furthermore, the D-scores for the gratitude IAT each time were statistically higher than 0, which indicates that gratitude is more strongly associated with self-related words than other-related words. However, no significant correlations were observed between the self-rating scales and the D-scores. Given that implicit and explicit measurements of gratitude may reflect different aspects of gratitude, it is necessary to examine the validity of the Gratitude IAT, as well as considering other methods, such as behavior observation and other-rated measurements.

Key words: gratitude, Implicit Association Test (IAT), implicit/explicit, validity, reliability

問題と目的

心理学における感謝

感謝は日常的に使われている言葉であり、社会的美德ともいわれている。心理学の視点から感謝を捉える際には、感謝は「与えられたものに対する情緒的な反応であり利他的な行為により恩恵を受けた後に生じるありがたい気持ち」(Emmons &

Crumpler, 2000), 「他者の善意によって自己が利益を得ていることを認知することで生じるポジティブな感情」(Tsang, 2006) などと定義されている。このような定義のもとに「感謝」は、受益場面で生じた感情である「状態感謝」と、「他者の善意によって自己が利益を得ていることを認知することで生じた感謝の気持ちを持って反応する一般的傾向」(McCullough, Emmons, & Tsang, 2000) の個人差である「特性感謝」に分けて検討するのが主流とされてきた。

特性感謝の測定にあたっては、自己報告式の尺度が開発されている。その中で最もよく使われているのは McCullough et al. (2000) が作成した Gratitude

連絡先: aikawa@human.tsukuba.ac.jp (相川 充)

1) 本研究の実施にあたり、筑波大学心理学類鈴木理央さん、関尾湖富さんより、多大なご協力をいただきました。深くお礼を申し上げます。

Questionare-6 (GQ-6) と Watkin, Grimm, & Hailu (1998) が作成した Gratitude Resentment and Appreciation Test (GRAT) である。

GQ-6は特性感謝を単因子構造として捉える6項目の尺度であり、人生満足感や主観的幸福感、共感性、自尊心などと正の相関、不安や抑うつなどと負の相関があることが検証されている (Watkins, Woodward, Stone, & Kolts, 2003)。日本におけるGQ-6の研究では、逆転項目である項目6「誰かに対して、または何かに対して感謝を感じるのは、時間がしばらくたってからだ」は因子負荷量が低いため、削除された (白木・五十嵐, 2014)。その原因として、日本を含む相互協調的な文化では、個人が他者から好意を受けた際に、はじめに負債感が喚起され、その後に感謝を感じるため、日本人は、感謝特性が高くともすぐに感謝を感じるわけではない可能性が指摘されている (白木・五十嵐, 2014)。

GRATは3因子構造の44項目の尺度であり、特性感謝を自然や季節のうつろいへの感謝を表す「自然への感謝」、対人関係における感謝を表す「他者への感謝」、感謝を抱きやすい人は「剥奪されている」「報われていない」といった思いを抱きにくいという仮説に基づく「豊かさの感覚」という三つの側面から捉えている。なお、GRATの項目は、文化差を表す項目を含んでいるため、原尺度をそのまま翻訳して欧米圏以外の文化圏で使用することは不適切であると指摘されている (岩崎, 2015; Watkins et al., 2003)。

回答者は、これらの自己報告式尺度に回答する際に、社会的望ましさの影響を受け、回答を歪める可能性がある。特に感謝のような美德は社会的に必要とされていることから、社会的望ましさの影響を受けるだけでなく、天井効果が現れやすく、個人差が現れにくい (Watkins, 2014)。

以上のことから、社会的望ましさの影響を受けず、回答者の意識的な回答への統制が難しい、特性感謝を測定する方法を開発する必要があると言える。

潜在的測定法

近年、人の態度や行動には意識的な部分と非意識的な部分の双方が影響することが明らかにされており、非意識的あるいは潜在的な部分が人の認知や行動に果たす役割に注目が集まっている (小塩・西野・速水, 2009)。こうした流れの中で、人の潜在的な側面を測定する方法として、潜在的連合テスト (Implicit Association Test; 以下 IAT) が開発された (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)。

IATとはコンピュータ画面中央に連続して呈示される刺激語を、回答者に「できるだけ早く、かつ正確に」と教示した上でグループに分ける課題を課し、異なる概念同士を分類する際の反応時間の違いにより、概念間の連合の強さを測定するテストである。

顕在的測定法の一つである自己報告式尺度と、潜在的測定法の一つであるIATの両者と、社会的望ましさとの関係を検討した研究によると (Egloff & Schmukle, 2002)、社会的望ましさ尺度の得点と自己報告式尺度の得点の間には正の相関があったが、社会的望ましさ尺度の得点とIATの得点とは無相関であった。IATは、回答者が何を測定されているのか予測することが困難であり (小林・岡本, 2004)、刺激語の分類に対する反応時間を指標とするため、意識的に統制することが難しく、社会的望ましさに影響されにくいのである (藤井・澤海・相川, 2015a)。

IATが開発された初期段階では、IATは主に潜在的態度やステレオタイプなどの測定 (Greenwald et al., 1998; Greenwald & Farnham, 2000) に用いられていた。例えば、Dasgupta, McGhee, Greenwald, & Banaji (2000) は、アメリカ人大学生を実験参加者として、アフリカ系アメリカ人と白人アメリカ人に対する評価を顕在・潜在という二つの側面から測定した。その結果、参加者は、顕在的には平等主義的な評定を行っていても、潜在的にはアフリカ系アメリカ人よりも白人アメリカ人をポジティブに評価していることが明らかになった。

ストループ課題やブライミングなどを用いた潜在的測定法に比べて、IATは信頼性・妥当性に優れ、個人差の測定にも十分に敏感であるとされている (潮村, 2008, 2016)。そのため、IATは潜在的態度のみならず、対人不安 (Egloff, & Schmukle, 2002; 藤井, 2013)、ビッグファイブ (Back, Schmukle, & Egloff, 2009; Mandy & Gernotvon, 2007)、シャイネス (相川・藤井, 2011; Asendorpf, Banse, & Mücke, 2002; 藤井・相川, 2013) などの個人特性の測定にも用いられている。

ただし、IATで個人特性を測定する際には注意が必要である。なぜならば、潜在的「態度」を測定する際には、ターゲット概念は扱いたい態度の対概念、例えば黒人と白人に対する態度を検討したい場合、「黒人」―「白人」であり、属性概念は、その対象を評価する対概念「快」―「不快」となる。これに対して、潜在的「個人特性」を測定する際に、ターゲット概念は特性の所有者である「自己」―「他者」、属性概念は検討したい特性の対概念、例えば対人不安を測定する場合、「不安な」―「冷静な」

となる。このように、IAT は常に二つの対概念間の連合を取り扱う課題であることから、概念間の連合はあくまでも相対的なものになる。「白人」と「快」の間で示された繋がりは、「黒人」と「不快」の繋がりと比べたものであり、「黒人」を他の人種に変えた場合、結果が変わる可能性がある。

また、IAT を用いた個人特性の測定に関しては、個人特性の二重分離モデル (double dissociation model) が提唱されている (Asendorpf et al., 2002)。自己報告式で測定された個人特性に関する顕在的な自己概念は、個人が意識的に統制可能な行動を予測しているのに対して、IAT のような潜在的測定法で測定された潜在的な自己概念は、対人相互場面において意識的な統制が難しい行動を予測している。つまり、潜在的測定法と顕在的測定法は、行動の異なる側面に対して予測妥当性を持つと考えられている (例えば：Asendorpf et al., 2002; Egloff & Schmukle, 2002; 藤井・上淵, 2010; 稲垣・伊藤, 2017)。日本で行ったシャイネスに関する追試では、シャイネスの顕在的尺度は賞賛獲得行動や拒否回避行動、社交的行動といった統制可能なシャイ行動の高さを予測し、シャイネス IAT は統制が困難な対人緊張というシャイ行動の高さを予測していた (相川・藤井, 2011; 藤井・相川, 2013)。このように、IAT と自己報告式尺度は同じ特性の異なる側面を測定している可能性が考えられる。

なお、中国ではすでに特性感謝を測定する感恩 IAT (Gratitude IAT) が開発されている (何・刘・惠, 2013)。しかし、IAT の刺激語は文化差を含む意味のある言葉であるため、そのまま日本語に翻訳し、適用することは難しい。感恩 IAT の妥当性について検討した結果、特性感謝を測定する自己報告式尺度 (Adolescent Gratitude Scale: 以下 AGS; 何・刘・惠, 2012) との有意な相関が見られなかった。また、何他 (2013) において信頼性の検討は行われておらず、さらなる検討が必要である。

以上の諸点を踏まえて、本研究は、日本語による特性感謝の程度を測定する IAT の開発を試みる。感謝 IAT が開発できれば、社会的望ましさの影響を受けずに、特性感謝の程度を測定することが可能になる。また、感謝 IAT が開発できれば、個人特性の二重分離モデルに従って、自己報告の尺度とは別の側面から、多面的に特性感謝を捉えることができる。

本研究では、「自己」―「他者」をターゲット概念とし、「感謝」の対概念を「忘恩」とする感謝 IAT を開発し、その信頼性・妥当性を検討する。妥当性の検討の第一歩として、感謝 IAT と顕在的測

定法で測定された特性感謝との関係を調べ、また特性感謝と正の相関を持つと考えられる自尊心、共感性、感謝行動との関係も検討する。

方 法

本研究は第一著者の所属機関の研究倫理審査委員会からの承認を得て実施された。

実験参加者

実験参加者は、茨城県内の大学生39名 (男性11名、女性28名) であった。途中で女性1人が脱落したため、38名のデータを分析に用いた。38名の参加者の平均年齢は20.38歳 ($SD=1.16$) であった。参加者の1回目と2回目の実験の平均間隔時間は4.55日 ($SD=2.33$) であった。

手続き

実験は2回に分けて行った。参加者が実験の目的を知ることによって生じる回答バイアスを防ぐため、実験名称を「個人特性が言葉の分類課題に与える影響」と称して参加者を募集した。実験参加者を実験室に案内した後、実験の内容を説明した。倫理的配慮として、何らかの理由で中断したくなった場合は申し出ればいつでも中断できることも伝えた。実験参加者の同意を得た後、感謝 IAT、自己報告式尺度の順番で実験を実施した。自己報告式尺度は対人的感謝尺度と感謝行動尺度からなる感謝の質問紙と自尊感情尺度と多次元共感測定尺度から構成される質問紙の二つのパターンを用意した。どちらかを1回目の実験で実行するのにかについては、参加者ごとにカウンターバランスを取った。1回目の実験から3日～1週間以内に、再度参加者に実験室まで来てもらい、2回目の実験を行った。2回目の実験では、一回目と同じく感謝 IAT を行い、続いて1回目の実験の際に回答した質問紙ではない方の質問紙に回答してもらった。最後に本実験の本当の目的に関するデブリーフィングをした上で質問を受け付け、謝礼を渡して実験を終了した。

感謝 IAT

刺激語の選択 感謝 IAT の刺激語の選定においては、感謝と忘恩のカテゴリーに関する言葉は心理学専攻の教員1名と大学院生1名および大学生2名が協議し、「類語検索辞典日本語シソーラス第2版 (大修館書店)」、「類語辞典 (東京堂出版)」、「Weblio」から選出した。自己と他者のカテゴリーの刺激語は、藤井・澤海・相川 (2015a, 2015b) および相川・

藤井（2011）に倣った。本研究の感謝 IAT で用いたカテゴリー語ならびに刺激語は、Table 1 に示したとおりである。

感謝 IAT の実施 感謝 IAT の実施にあたっては、Millisecond 社の製品である Inquisit5.0 を用いて実験プログラムを制御した。

感謝 IAT は 7 つのブロックによって構成した。ブロック 1 においては、2 つのターゲット概念のうち「自己」を画面上部の左上に、「他者」を右上に呈示しておいた。画面中央に現れる刺激語が、「自己」に関する語であると判断すれば「F」キーを押し、「他者」に関する語であると判断すれば「J」キーを押すよう教示した。ブロック 1 は 20 試行であった。

ブロック 2 では、2 つの属性概念のうち「感謝」を画面上部の左上に、「忘恩」を右上に呈示しておいた。画面中央に現れる刺激語が、「感謝」に関する語であると判断すれば「F」キーを押し、「忘恩」に関する語であると判断すれば「J」キーを押すよう教示した。ブロック 2 は 20 試行であった。

ブロック 3 とブロック 4 はブロック 1 とブロック 2 の組み合わせ課題となる。画面の左上には「自己」と「感謝」が、右上には「他者」と「忘恩」を呈示しておいた。画面中央に現れる刺激語が、「自己」または「感謝」に関する語であると判断すれば「F」キーを押し、「他者」または「忘恩」に関する語であると判断すれば「J」キーを押すよう教示した。ブロック 3 は 20 試行、ブロック 4 は 40 試行であった。

ブロック 5 は、ブロック 1 のカテゴリーの呈示位置が逆であった。「自己」は右上に、「他者」は左上に呈示した。ブロック 5 の試行は 20 であった。

ブロック 6 とブロック 7 は、ブロック 3 とブロック 4 の組み合わせと逆になった課題であった。画面の左上には「他者」と「感謝」が、右上に「自己」と「忘恩」を呈示しておいた。画面中央に現れる刺激語が、「他者」または「感謝」に関する語である

と判断すれば「F」キーを押し、「自己」または「忘恩」に関する語であると判断すれば「J」キーを押すよう教示した。ブロック 6 は 20 試行、ブロック 7 は 40 試行であった。組み合わせ課題の実施順序を相殺するために、ブロック 1、3、4 とブロック 5、6、7 の実施順番は参加者ごとにカウンターバランスを取った。刺激語呈示の間隔時間は 250ms であった。

本論文では、ブロック 3、4 のように「自己」と「感謝」が画面の同じ側、「他者」と「忘恩」が画面の同じ側にあるブロックは一致ブロック、それに対して、ブロック 5、6 のように「自己」と「忘恩」が画面の同じ側、「他者」と「感謝」が画面の同じ側にあるブロックは不一致ブロックと述べる。一致ブロックを分類する際の反応時間が、不一致ブロックより短い場合、「自己」と「感謝」の連合は、「他者」と「感謝」の連合より強いと考えられる。

なお、すべてのブロックにおいて、参加者が分類を間違えた場合（例えば、刺激語を右側のカテゴリーに分類すべき際に「F」キーを押した場合）、画面中央に赤い「X」印が現れ、もう一方のキーを押すと、次の試行に進めるようにプログラミングされていた。

顕在的測定法

対人的感謝尺度 藤原・村上・西村・濱口・櫻井（2014）が GQ-6 および GRAT に基づいて作成した、他者に対する感謝感情を表現する 8 項目で構成される尺度であり、1 因子構造である。項目例は、「普段の生活の中で、まわりの人に感謝すべきことがたくさんある」、「他の人に感謝することを書きだしたら、たくさん書ける」、「いろいろな人に感謝している」などである。元の尺度は小学生用であるが、大学生にも適用できる（吉野・相川、2017）。回答は「全くあてはまらない（1点）」から「とてもあてはまる（10点）」の 10 点法で求めた。

Table 1
感謝 IAT の刺激語

| 自己 | 他者 | 感謝 | 忘恩 |
|-----|------|-------|------|
| 自分 | 友人 | ありがたい | 不義理 |
| 自身 | 知人 | 謝恩する | 平然 |
| 私 | 他人 | 謝意を表す | 心無い |
| 我々 | 知り合い | 恩に着る | 恩知らず |
| おのれ | ともだち | 謝礼する | 無神経 |

注 1）上段はカテゴリー語および属性語、下段は刺激語。

注 2）謝恩、謝意と謝礼は「自己」との繋がりを強めるため、動詞の形式に変更した。

感謝行動尺度 相川 (2014) が作成した、感謝行動を測定する尺度である。「家族への感謝行動」(「私に優しくしてくれる家族に、ありがたうと言う」など)、「友人への感謝行動」(「私が困っている時相談にのってくれた友人に、感謝の言葉を口にする」など)、「儀礼的感謝行動」(「感謝すべき状況であれば、心では感謝していなくても感謝の言葉を口にする」など)という三つの因子からなる。合計10項目に対して、「全くあてはまらない (1点)」から「とてもあてはまる (10点)」の10件法を用いて回答を求めた。

日本語版ローゼンバーク自尊感情尺度 櫻井 (2000) が作成した Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の日本語版である。10項目から構成されている単因子構造の尺度である。項目例は、「私は自分に満足している」、「私は自分に対して、前向きの態度をとっている」、「私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる」などであり、「あてはまらない (1点)」から「あてはまる (5点)」の5件法で尋ねた。

多次元共感尺度 櫻井 (1988) が作成した

Davis (1983) の多次元共感測定尺度の日本語版、計28項目のうち、本研究では、特性感謝に関連すると考えられる2つの因子「視野取得」(「何かを決定する時には、自分と反対の意見を持つ人たちの立場にたって考えてみる」など)と「共感的配慮」(「自分よりも不幸な人たちには、やさしくしたいと思う」など)の質問項目のみを使用した。回答は、「あてはまらない (1点)」から「あてはまる (5点)」の5件法で求めた。

結 果

D-scoreの算出

IATの得点は、D-score (Greenwald et al., 2003) を算出し、感謝IATの得点とした。なお得点化の前に、稲垣・伊藤 (2017), Fujii, Sawaumi, & Aikawa (2013) と同様、3000ms以上の反応時間を示した試行を3000msに、300ms以下の反応時間を示した試行を300msに、それぞれ置き換えた。この変換は Greenwald et al., (1998) において採用されている。1回につき、各参加者の得点計算に用いた試行数は120試行である。38名の参加者に対して、2回、得点を得たため、120×2×38、合わせて9120試行が得点計算に使われた。9120試行のうち、反応時間は3000msを超えた試行は7試行、300msを超えていなかった試行は1試行であった。

D-scoreの計算の手続きは下記の通りである。

得点の算出には、ブロック3, 4, 6, 7のデータを使用した。ブロック3と6の全ての試行の反応時間をまとめ、合併標準偏差Aを算出し、ブロック4と7についても同様に計算し、合併標準偏差Bを算出した。また、ブロック3, 4, 6, 7ごとの正しく分類した試行の平均反応時間を算出した。正しく分類していない試行、つまりエラー試行の反応時間を、エラー反応が生じたブロックにおける正答の平均反応時間に600msを加えた値に置換し、ブロックごとに平均反応時間を再度算出した。さらに、「自己-感謝」、「他者-忘恩」の組み合わせ課題を行ったブロックの平均反応時間を、「他者-感謝」、「自己-忘恩」の組み合わせ課題を行ったブロックの平均反応時間からそれぞれ引くように計算した。

最後に、それぞれの差得点を、標準偏差A, Bで割り、得られた値を加算して平均を算出した。この得点、つまりD-scoreが高いほど、「自己」と「感謝」は「他者」と「忘恩」より強く結びついていることを示す。

感謝IATの再検査信頼性

感謝IATの再検査信頼性を算出する前に、まず2回のD-scoreが正規分布に従うかどうかを検討した。

2回のD-scoreの分布図はFigure1-1とFigure1-2に示した。今回の分析に用いた人数が少ないため、Shapiro-Wilk法による正規性の検定を行った。その結果、2回とも有意ではなく、「正規分布ではない」という帰無仮説は棄却された。つまり、2回ともD-scoreは正規分布に従っていた。そこで感謝IATの再検査信頼性を検討するために、藤井・澤海・相川 (2015b) と同様、2回の感謝IATの得点の相関係数を算出した。その結果、 $r=.63$ ($p<.001$) であり、有意な正の相関が得られた。

「感謝」—「自己」、「忘恩」—「他者」の連合の強さ

D-scoreの理論的中央値は0であるため、感謝IATの二つの時点で得られたD-scoreに対して、検定値を0とした1サンプルのt検定を行った。その結果、いずれのD-scoreも0より有意に高かった(1回目: $M(SD) = .60(.34)$, $t(38) = 10.90$, 2回目: $M(SD) = .53(.42)$, $t(37) = 7.81$ ($p<.001$)。これは、「感謝」と「自己」の連合が「忘恩」と「他者」の連合よりも有意に強かったことを意味する。

各尺度の内的一貫性の確認と下位尺度の構成

各自己報告式の尺度に対して、内的一貫性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、対人的感謝尺度は $\alpha = .92$ であった。感謝行動尺度では「友人に対する感謝行動」因子で $\alpha = .78$ 、「家族に対する感謝行動」因子で $\alpha = .82$ 、「儀礼的感謝行動」因子で $\alpha = .90$ を示した。自尊感情尺度は $\alpha = .91$ であった。

多次元共感測定尺度について、「視野取得」因子の α 係数は極めて低く、 $\alpha = .18$ であった。そこで「何かを決定する時には、自分と反対の意見を持つ人たちの立場にたって考えてみる」、「どんな問題にも対立する二つの見方（意見）があると思うので、その両方を考慮するように努める」という2項目を削除

したところ、 $\alpha = .66$ を示した。「共感的配慮」因子の α 係数はやや低く、 $\alpha = .62$ であった。そこで「周りの人たちが不幸でも、自分は平気でいられる」という項目を削除したところ、 $\alpha = .69$ を示した。以降の分析では、上記の3項目を削除した得点を用いた。

各尺度の逆転項目を処理した上で、因子ごとに項目の得点を加算し、各下位尺度の得点を算出した。

感謝 IAT 得点と各尺度得点の相関

二つの時点での感謝 IAT の得点と、対人的感謝、友人への感謝行動、家族への感謝行動、儀礼的感謝行動、視点取得、共感的配慮、自尊感情、それぞれの尺度得点との相関関係を検討した。2時点での感

一回目のD-scoreの分布

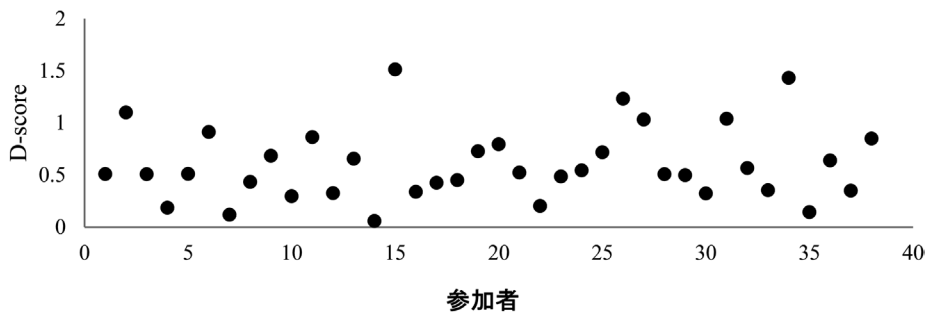


Figure 1-1. 一回目 D-score の分布図。

二回目のD-scoreの分布

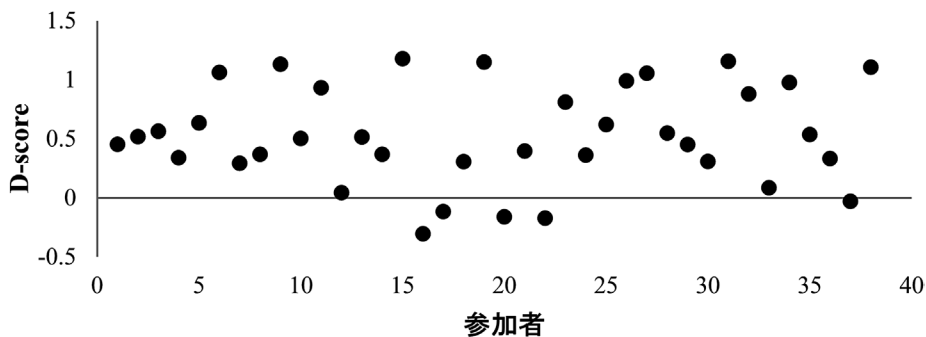


Figure 1-2. 二回目 D-score の分布図。

謝 IAT の D-score と各尺度間の相関係数、および記述統計量は、Table 2にまとめた通りである。

2 時点での感謝 IAT の D-score と各尺度との相関係数は、1 回目の場合も、2 回目の場合も、いずれも有意ではなかった。

考 察

本研究の目的は、潜在的な特性感謝を測定する感謝 IAT を開発し、その信頼性と妥当性を検討することであった。

本研究では、感謝 IAT の信頼性の指標として、一定の時間を置いて感謝 IAT を 2 回実施し、再検査法により安定性を検討した。2 時点で測定した感謝 IAT の D-score の関係について検討した結果、1 回目と 2 回目の感謝 IAT の得点の相関係数は $r = .63$ であった。IAT 研究に関するメタ分析では、IAT の再検査信頼性の範囲は $r = .25 \sim .69$ であり、中央値は $r = .50$ と報告されている (Lane, Banaji, Nosek, & Greenwald, 2007)。これらの結果を踏まえれば、本研究で開発した感謝 IAT は、十分な再検査信頼性を持つことが確認できたといえる。

2 時点での D-score が、理論的中央値よりも高いか否か検討したところ、いずれの得点も 0 より有意に高かった。この結果は「感謝」と「自己」の連合が、「他者」と「忘恩」の連合よりも有意に強いことを示している。これは、感謝 IAT の回答者が感謝というポジティブな感情と自己を結びつけやすいことを示唆しており、この結果は何他 (2013) の作成した感恩 IAT における反応傾向と一致している。

感謝 IAT の基準関連妥当性を検証するために、顕在的自己報告式の特性感謝尺度との関係、および

特性感謝と正の相関を持つと考えられる感謝行動、視点取得、共感性、自尊感情、それぞれを測定する尺度との相関関係を検討したが、いずれの相関係数も、有意ではなかった。この結果の解釈としては、2 点が考えられる。

1 点目は、特性感謝には自己報告式尺度で測定される顕在的側面と、潜在的測定法で測定される潜在的側面が別個に存在しているという二重分離モデルに従った解釈である。先行研究では、自尊心を顕在的測定法である質問紙と潜在的測定法の自尊心 IAT を用いてそれぞれ測定し、相関があるかどうかを調べたところ、両者はほぼ無相関であった (Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000; 藤井・澤海・相川, 2014; 小塩・西野・速水, 2009)。中国で開発を試みた感恩 IAT も同様の相関パターンが見られた (何他, 2013)。また、シャイネスや対人不安といった個人特性の二重分離モデルの観点からすれば、特性感謝に対する潜在的測定法と顕在的測定法は、特性感謝の異なる側面を測定している可能性がある。そのために両者に有意な相関が認められなかったという解釈である。

2 点目は、特性感謝を IAT で測定できるかという本質的な問題である。他者から何らかの利益を受ける受益場面で生じた感謝感情は、その利益供与者である他者に対するものであり、状態感謝は「他者」と連合していると考えられることもできる。状態感謝の経験の蓄積が特性感謝の程度を形成しているとするならば、本研究の IAT で「感謝」のカテゴリーで刺激語として提示した語は、「自己」よりも「他者」と強く連合しているかもしれない。つまり「感謝」と「自己」の連合が強い人が、特性感謝が高いとは限らないかもしれないという解釈である。

Table 2
各尺度の相関係数と記述統計量 (N = 38)

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | M | SD | α |
|-----------------|---|--------|------|------|-------|-----|------|-------|------|-------|------|----------|
| 1. 一回目の D-score | — | .63*** | -.01 | -.01 | .05 | .30 | -.19 | -.15 | .25 | .60 | .34 | — |
| 2. 二回目の D-score | | — | .12 | -.06 | -.06 | .01 | -.18 | -.18 | .14 | .53 | .42 | — |
| 3. 対人的感謝得点 | | | — | .34* | .28 | .05 | .26 | .40* | -.21 | 66.24 | 8.98 | .92 |
| 4. 友人への感謝行動得点 | | | | — | .56** | .26 | .17 | .42** | -.19 | 35.13 | 3.94 | .78 |
| 5. 家族への感謝行動得点 | | | | | — | .10 | .27 | .26 | .01 | 18.31 | 5.80 | .82 |
| 6. 儀礼的感謝行動得点 | | | | | | — | -.29 | -.23 | -.02 | 20.38 | 6.57 | .90 |
| 7. 視点取得得点 | | | | | | | — | .44** | .12 | 22.03 | 3.46 | .69 |
| 8. 共感的配慮得点 | | | | | | | | — | -.28 | 19.63 | 2.71 | .66 |
| 9. 自尊感情得点 | | | | | | | | | — | 32.35 | 9.10 | .91 |

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

この点を予備研究の結果から予め考慮に入れて、本研究では「感謝」のカテゴリーに呈示する刺激語を、「自己」との結びつきを強調するために、名詞であった刺激語を動詞の形式に修正して行った（例えば、「謝礼」を「謝礼をする」に修正した）。このような修正を行ってもなお、本研究で開発した感謝IATは、特性感謝を必ずしも測定していないかもしれないという解釈の余地がある。

今後の研究においては、感謝IATの仮説を再検討するとともに、その他の潜在的個人特性、または感謝の他者評定法や行動観察法などと組み合わせて再度感謝IATの妥当性の検討を行うことが望まれる。

引用文献

- 相川 充 (2014). 対人場面における感謝感情尺度および感謝行動尺度の作成：対人関係に及ぼす「感謝」のポジティブ効果に関する拡張・形成理論からの実験的研究 平成23～25年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（C）（一般）課題番号23530815研究成果報告書, 69-115.
- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002). Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: The case of shy behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 380-393.
- Back, M. D., Schmukle, S. C., & Egloff, B. (2009). Predicting actual behavior from the explicit and implicit self-concept of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 533-548.
- Bosson, J. K., Swann, W. B., & Penebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 631-643.
- Dasgupta, N., McGhee, D. E., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (2000). Automatic preference for White Americans: Ruling out the familiarity effect. *Journal of Experimental Social Psychology*, 36, 316-328.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Egloff, B., & Schmukle, S. C. (2002). Predictive validity of an Implicit Association Test for assessing anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 1441-1455.
- Emmons, R. A., & Cheryl A. C. (2000). Gratitude as a human strength: Appraising the evidence. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 19, 56-69.
- 藤井 勉 (2013). 対人不安 IAT の作成および妥当性・信頼性の検討 パーソナリティ研究, 22, 23-36.
- 藤井 勉・相川 充 (2013). シャイネスの二重分離モデルの検証——IAT を用いて—— 心理学研究, 84, 529-535.
- Fujii, T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2013). Test-retest reliability and criterion-related validity of the Implicit Association Test for measuring shyness. *IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences*, E96-A, 1768-1774.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2014). 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛——自己愛の3下位尺度の関連から—— 感情心理学研究, 21, 162-168.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2015a). 顕在的・潜在的シャイネスと心理的適応との関連——IAT を用いて—— 感情心理学研究, 22, 128-134.
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2015b). シャイネス IAT の再検査信頼性——潜在的シャイネスの変容可能性も含めて—— 心理学研究, 86, 361-367.
- 藤井 勉・上淵 寿 (2010). 潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究, 58, 263-274.
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・櫻井茂男 (2014). 小学生における対人的感謝尺度の作成 教育心理学研究, 62, 187-196.
- Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 1022-1038.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Greenwald, A.G., Nosek, B.A., & Banaji, M.R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal*

- of Personality and Social Psychology*, 85, 197-216.
- 何安明・刘华山・惠秋平 (2012). 基于特质感恩的青少年感恩量表的编制 -- 以自陈式量表初步验证感恩三维结构理论, 华东师范大学学报 (教育科学版) (*Journal of East China Normal University (Educational Sciences)*), 30, 62-69.
- 何安明・刘华山・惠秋平 (2013). 大学生感恩内隐效应的实验研究, 心理发展与教育 (An experimental research on implicit and explicit gratitude of undergraduates. *Psychological Development and Education*), 29, 23-30.
- 稲垣 (藤井) 勉・伊藤忠弘 (2017). Implicit Association Test を用いた不安の測定と行動予測 長崎大学大学教育イノベーションセンター紀要, 8, 1-16.
- 岩崎真和 (2015). 青年期の感謝と自己の発達に関する実証的研究 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文
- 小林知博・岡本浩一 (2004). IAT (Implicit Association Test) の社会技術への応用可能性 社会技術研究論文集, 2, 353-361.
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 17, 250-260.
- Mandy, G., & Gernot, V. C. (2007). Measuring Big-Five personality dimensions with the implicit association test: Implicit personality traits or self-esteem? *Personality and Individual Differences*, 43, 2205-2217.
- McCullough, M. E., Emmons, R. A., & Tsang, A. (2000). The grateful disposition: A conceptual and empirical topography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 112-127.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 櫻井茂男 (1988). 多次元共感測定尺度の構造と性格特性との関係 奈良教育大学教育研究所紀要, 30, 125-132.
- 櫻井茂男 (2000). ローゼンバーク自尊感情尺度日本語の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 潮村公弘 (2016). 自分の中の隠された心：非意識的態度の社会心理学 サイエンス社
- 潮村公弘 (2008). 潜在的自己意識の測定とその有効性 下斗米淳 (編) 自己心理学 6 社会心理学へのアプローチ (pp. 48-62) 金子書房
- 白木優馬・五十嵐祐 (2014). 感謝特性尺度邦訳版の信頼性および妥当性の検討 対人社会心理学研究, 14, 27-33.
- Tsang, J. (2006). Gratitude and prosocial behavior: An experimental test of gratitude. *Cognition and Emotion*, 20, 138-148.
- Watkins, P. C. (2014). *Gratitude and the good life: Toward a psychology of appreciation*. New York: Springer.
- Watkins, P. C., Grimm, D. L., & Hailu, L. (1998). Counting your blessings: Grateful individuals recall more positive memories. *Presented at the 11th Annual Convention of the American Psychological Society Convention* (Denver, CO).
- Watkins, P. C., Woodward, K., Stone, T., & Kolts, R. L. (2003). Gratitude and happiness: Development of a measure of gratitude, and relationship with subjective well-being. *Social Behavior & Personality: An International Journal*, 31, 431-452.
- 吉野優香・相川 充 (2017). 感謝が自己と対人関係に及ぼすポジティブ効果に関する拡張・形成2過程モデルの検証 平成26~28年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (C) (一般) 課題番号26380839研究成果報告書, 13-23.
(受稿10月31日：受理11月28日)